



向かって右から小山部長、山下課長、内林主任

株式会社 鐵建

お客様の声
01
会社の躍進を支えたカギは、
原価管理システムのフル活用！
生産効率向上・社員のモチベーションアップにも結実！！

1998年にS/F原価管理システムを導入以来、原価管理をフル活用して会社の成長や生産効率向上、従業員の働きがいに結実させてきた株式会社鐵建。細やかな原価管理に奮闘してきた小山幸江取締役総務部長、山下雅美総務部課長、内林喜郎総務部主任にお話をうかがいました。

S/F原価管理システムを導入されたのが1998年12月。いち早い導入ですね。導入理由を教えてください。

小山部長：現社長の小山が社長就任前から本格的に積算や工事受注の決裁などを行っていました。その年、他の鉄骨ファブからの勧めでS/Fシステムを導入し施工図・指示書が軌道に乗ったことをふまえ、懸念だった工事原価をより正確に把握したいという思いに、ドッドウエル

の関口さんが提案してくれたのがきっかけでした。

導入して良かったことは？

小山部長：導入前は全て手計算でしていたことを考えれば、嘘のようにものすごく時間を短縮できました。今では入力後、クリック一つで集計され、原価率や粗利率まで出る。こんな楽なことはありません。どんな物件の何の作業に何時間かかり、何にてこずったのか、実行予算書に対してどうだったかが詳細に分かり、図面だけでは分からな

い、似た物件の積算など様々なことに役立てられるようになりました。

どう使ってこられたのですか。

小山部長：基本的なマスタは設定されていましたが、費用や作業のマスタを時間をかけ決め、導入翌年4月からデータ入力を本格的に始めました。当時は各業者からの請求書の入力と社員の給料から単純に割り出した単価を使用し、労務費伝票入力。まだ間接費は考慮するに至らなかった状態でした。その後、



小山慎一社長



上/会社ロビー 下/事務所スタッフの皆さん

使いこなしていくうちに間接費や各単価の精度が高まってきました。

導入してから赤字がなくなったそうですね。

小山部長：工事原価が把握できるようになった2001年以降は赤字がなくなりました。鉄骨業界は厳しい状況が続く、昔ながらのドンブリ勘定では、鉄骨ファブが利益を生み出す構造になりません。それが原価管理によって「見える化」し、数字を把握できるようになりました。「実行予算書」を社長が作成するに当たって必要な「係数」があります。原価管理に請求書の数字と日報のデータのみを入力していたのでは粗利は不明でした。決算書上の経費の扱いを原価管理にどう反映するか、税理士と社長と私とで検討した結果、今の粗利把握に至りました。「係数」を出すため、決算書を定期的に予想・検証。予想と大幅な違いが出たら、そのつど「係数」を修正し、粗利が合うようにしてきたので、現在は数字が早めにつかめるようになりました。中でも間接費の諸経費決定には試行錯誤を重ねました。労務費の原寸・工場・溶接・塗装単価も、日報を記入する社員にかかる全ての金額から割り出すので手間がかかります。でも、それらは労働時間の推測にも左右するので正確な数字が必要。年月をかけることで正確

な数字近くもっていったと思います。「原価率」によって、その月の工事の進捗状況も把握でき、取引先への請求額にも反映できるようになりました。工事ごとの利益額の把握だけでなく、工事の受注決定における参考資料になったのです。図面や工事金額だけでは分からない内容が把握可能になったので赤字が減ったのではないかと思います。

どのような流れで原価管理を活用しているのですか？

山下課長：私は労務費を担当していて、57人分の日報から毎日約1時間入力しています。それを基本に、月末にはタイムカードと照合して「賃金計算一覧表」を印刷します。次に労働時間集計表を月3回作成し、時短への取り組みとして残業時間を管理しています。年度初めにはそれを活用して新年度の労働時間を予測、経過率を出すときの基準としています。工数については月別・工事別に内訳表を作成。それを基に年間の作業別工数表を年2回作成し、各作業の全体に占める時間の割合を算出しています。また、システムの工数元帳には絞り込み機能があるので、作業グループごとに時間を集計し、作業の実行予算消化率を月2回管理。社長が出す「実行予算書」の予定時間を基に、そのときの実際の作業ごとの時間も絞り込みを活用して集計。物件終了後には「工事別所要時間集計表」を作成。そのデータを社長の指示により当社オリジナルの「結果考察書」に入力。社長がおこなう工事毎の最終評価と次物件の検討資料を作成しています。

内林主任：私は材料・外注の各業者から



山下課長

請求書が届いた時点で約10日間かけ入力しています。工事が完了した場合は入金額を全額入力。確認後、集計し、「予算原価対照表」を小山部長を通じ社長に提出しています。また、全員の労働時間と生産量を基に「生産効率」を算出。社内全体と各部署のグラフを作成。部課長会議で見てもらい、生産状況が順調に進んでいるかを確認してもらっています。尚、グラフは毎月、工場各部署に掲示しています。年度末には間接費・材料の基となる係数を算出しています。

さまざまな形でフル活用しておられるんですね。

山下課長：時間をかけず効率をあげるにはどうすればいいか、各自が作業を改善する工夫を考えるようになってきたんですよ。

内林主任：原価管理は確かに手間がかかります。それでも生産効率向上につながっていることが、私たちの喜びです。

原価管理の意義とは？

小山部長：工事ごとの粗利額を知る上でなくてはならないものです。それだけでなく、安定した経営や利益を社員に還元できます。生産効率が100を超えた月には、みんなに目標達成手当を支給するようになり、そのことが特に若い社員のモチベーションアップにつながっています。残業時間の管理は健康管理にも生かれます。原価管理の数字には、ものすごくたくさんの可能性が詰まっていると思います。



株式会社 鐵建

代表取締役 小山慎一
〒375-0043
群馬県藤岡市東平井1410-4
☎0274-40-8040
Hグレード/SFシステム：1998年12月導入